

## 書評

目黒将史著

### 『薩琉軍記論——架空の琉球侵略物語 はなぜ必要とされたのか』

瀬戸 祐規

〈薩琉軍記〉とは、慶長十四年（一六〇九）三月初めから四月初めにかけての薩摩藩による琉球侵略を元に描かれた軍記物語群の総称である（個別の作品名ではなく、関連作品との混同を避けるため、本書の中では〈薩琉軍記〉と表記される）。この琉球侵略は、幕府の指示を受けた薩摩藩主島津家久の命により、樺山久高を大将、平田増宗を副将として、三千余りの島津勢が琉球国に侵攻して首里城を包囲し、琉球王尚寧を降伏させたものである。

しかし、『薩琉軍談』や『島津琉球合戦記』などの諸作品には事実がそのままの形では描かれず、架空の人物や地名が用いられ、架空の侵略物語が創作されている。このことは現存する百本余りの諸伝本・諸作品に共通する重要な要素として、記録なども含めた琉球侵略を記すすべてのテキスト

群（琉球侵略物）のうち、この要素を有するものを〈薩琉軍記〉と称し、区分している。その定義は、「薩摩方の武士新納武蔵守と佐野帯刀との対立譚を通して物語が展開（p15）」するということである。これを根幹に「対立譚の増幅が、物語を生長させ（p109）」、そこにさまざまな言説を取り込むなどすることで増広本を生み出し、作品群を構成していくのである。

本書は、目黒将史氏による一連の〈薩琉軍記〉関係論考を集成したものである。ここで取り扱われる内容は、伝本研究や諸本論、成立、享受、本文の変遷に始まり、『通俗三国志』や近松浄瑠璃といった近世文芸の享受の様相と〈薩琉軍記〉生成との関わり、異国合戦記としての位置づけ、対外情勢の変化と異国認識、予言文学としての歴史叙述のあり方、源為朝など武人の渡琉者伝承の変遷と再生産の様相、琉球知識に対する人々の関心のありようなど、作品そのものや軍記という枠組みを超え、関連するさまざまな事象や、作品が享受された当時の社会的背景・歴史認識まで多岐にわたるものである。

そのため、論ずべき点が多く、その一つ

一つについて言及しきれぬものではない。また、各章各節において言及されている内容は密接に関連している部分も多いため、まずは本書の概要を示すべく、各論考をまとめた本篇部分の目次を記し、その後、いくつかの論点について紹介を行うこととする。本篇の目次は以下の通りである。

序章 〈薩琉軍記〉研究の過去、現在

第一部 〈薩琉軍記〉の基礎的研究

第一章 〈薩琉軍記〉諸本考

第一節 諸本解題

付節 立教大学図書館蔵「薩琉軍記」コレクションについて

第二節 薩琉軍記遡源考

第三節 物語展開と方法——人物描写を中心に——

第四節 異国合戦描写の変遷をめぐって

第五節 系譜という物語——島津家由来譚をめぐって——

第二章 〈薩琉軍記〉世界の考察——

立から伝来、物語内容まで——

第一節 異国侵略を描く叙述形成の一齣——成立、伝来、享受を

めぐって―

## 第二節 琉球侵略の歴史叙述―日本

の対外意識と〈薩琉軍記〉

―

## 第三節 描かれる琉球侵略―武将伝

と侵攻の正当化―

## 第四節 偽書としての〈薩琉軍記〉

―「首里之印」からみる伝

本享受の一齣―

## 第二部 〈薩琉軍記〉の創成と展開の諸

相

### 第一章 物語生成を考える―近世の文

芸、知識人との関わりから―

### 第二節 近世期における三国志享受

の一樣相

### 第三節 語り物の影響をさぐる―近

松淨瑠璃との比較を中心に

―

### 第四節 敷衍する歴史物語―異国合

戦軍記の展開と生長―

### 第五節 歴史叙述の学問的継承

蝦夷、琉球をめぐる異国合

戦言説の展開と方法

### 第六節 予祝の物語を語る―〈予言

文学〉としての歴史叙述

## 第二章 甦る武人伝承―再生する言説

―

### 第一節 渡琉者を巡る物語―渡海、

漂流の織りなす言説の考察

―

### 第二節 琉球言説にみる武人伝承の

展開―為朝渡琉譚を例に―

### 第三節 語り継がれる百合若伝説―

対外戦争と武人伝承の再生

産―

### 第四節 為朝渡琉譚の行方―伊波普

猷の言説を読む―

### 終章 琉球から朝鮮・天草へ―異国合戦

軍記への視座―

また、資料篇として「薩琉軍記伝本一覽」

と六本の〈薩琉軍記〉伝本の解題と翻刻と

を収録する。前掲の目次からは、著者目黒

氏の関心の広さは言うに及ばず、〈薩琉軍

記〉が持つ軍記文学としての、また近世の

他の文芸や社会のありようを窺い知るもの

としての価値の高さが窺い知れよう。

では次に、いくつかの注目すべき点を取

り上げ、紹介する。第一は、近世軍記(近

世軍書)としての位置づけである。目黒氏

は〈薩琉軍記〉諸本の分類を行い、A1『薩

琉軍談』(※書名に冠した諸本番号は、氏

の諸本分類表による)を始めとするA群と

B1『島津琉球合戦記』に始まるB群、それ

らを受けて成立した増広本の増補群に区分

されること、A群の特色として(1) 侵攻

時の太守を「家久」ではなく「義弘」とす

ること、(2) 島津家由来譚を始祖誕生譚

として扱うこと、B群の特色として、(1)

侵攻時の太守を「家久」とすること、(2)

島津家由来譚を島津家系譜として扱うこ

と、などを指摘する。架空ではなく実在

する藩主の名を記しており、侵攻時の為政

者の名が異なるといふ点は、『大坂物語』

の版本と写本にみられる家康と秀忠という

為政者名の記載の相違のように、それぞれ

の成立時の社会状況の相違やそこから派生

する何かしらの意図が想起される。また、

新納武蔵守と佐野帯刀のうち、対立する一

方を擁護する立場の叙述を持つ作品や、さ

まざまな言説を取り込み、個別の性格を

伴った類本ともいふべき作品の存在は、〈薩

琉軍記〉が架空の合戦を描くという特殊性

を持ちつつも、戦国・近世軍記にみられる

特色を有することを窺わせる。

目黒氏によれば、A群の初期に位置づけられるA1『薩琉軍談』は、享保十七年（一七三二）に改め書きされたという「享保十七年分限帳」の引用などから「一七三二～五七年の間に成立した（p.93）」とみられ、B群の初期に位置づけられるB1『島津琉球合戦記』は一七九五年には成立していたとされる。現状では両者の成立の先後関係は不明とされるが、十八世紀中頃までには〈薩琉軍記〉が成立し、流布し始めていたと思われる。氏の論考により、近世軍記がその特色を有しつつこの頃まで展開していたことや、その具体的な様相を確認することができる。

第二は、〈薩琉軍記〉の構成と主題の問題、具体的には物語の結末の相違である。先述の島津家由来譚を物語の核心となる章段として序などに取り込み、それと関連づける形で物語の結末において侵攻の結果が語られる。これはA群B群それぞれに認められ、「A群では、A1『薩琉軍談』のように島津家と琉球王家との婚姻を侵攻の成果として位置づけ」たり、「A4『琉球征伐記』のように徳川の治世を言祝ぐ結末」とすること、「島津家と琉球王家との合体を侵

攻の結果として描き」、「いわば源氏の流入が侵攻の成果として語られている」とする。ここでは「島津家由来譚」を「島津氏が源氏であること」を語る前提として機能させ、結末の叙述と対応させることで、「琉球の日本化支配の正当性を意味している」と指摘する（以上、部分引用はpp.149―150）。これに対し、B群では後日譚として、寛文

十一年（一六三四）に謝恩使の正使として金武王子の来朝が共通して記されていることが特徴であり、金武王子は島津家久に伴われ、將軍家光に接見している。ここでB群は、「島津氏と琉球王国の合体」を記し、A群とは異なり明確ではないものの、やはり婚姻が窺えるような表現を用いているとする。しかし、ここでの焦点は、「琉球王を捕らえ、日本へ連行し、朝貢させること」にあったとし、先の金武王子の来朝は、琉球の日本への帰服を示すものであったと指摘する（以上、部分引用はp.142）。また、冒頭と結末の結びつきについては、「書簡を引用し、歴史叙述を展開する結末は、冒頭の島津氏の系譜を語り、歴史を物語るB群の『島津家由来譚』に呼応するのである」とする（以上、部分引用はp.150より）。

これらの考察・指摘から、叙述方法や個々の意図に相違を見せるものの、A群B群とも琉球の日本への帰服と日本による征服・支配の正当性を述べることに主眼があったと言える。両群の成立の先後関係は不明であるが、同じ主眼の元に物語を構成していることから、〈薩琉軍記〉は成立当初からこれを主眼としていたと考えられる。

第三は、〈薩琉軍記〉の享受の問題である。諸本は幕末に出版された増『絵本琉球軍記』を除き、そのほとんどが写本の形であるが、現存する伝本は非常に多い。伝本調査から「十八世紀後半から十九世紀にいくつかで書写されている（p.164）」「貸本屋と思われる蔵書印が少なからず押印されている（p.167）」いることを指摘し、流布の背景には、琉球物の出版の広まりなどといった琉球ブームの存在、貸本屋を媒介とした伝本の伝播や享受があったと推測している。また、伝来状況から学問所における書写の可能性や大名家・国学者などの享受によるテキスト伝播の可能性をも示唆する。なかでも、A4『琉球征伐記』は「尾張、三河地域において成立し、その周辺で享受されたことが指摘できるのである。さらにその享

受層は国学者や随筆家といった知識階級の  
高い人々であることも注目され（p.298）  
るとする。ある作品が特定の地域を中心  
に書写・所持され伝来するということは、そ  
こには地域特有の背景や意味があったこと  
が想起される。このことは、畠山氏関係軍  
記の一つである『畠山家譜』が、十八世紀

半ば以降たびたび書写され、その伝本が  
「大和・河内・紀伊の三国が隣接する地域、  
とくに紀ノ川沿いに集中的である」（川岡  
勉「解説」 黒田俊雄編『畠山記集成』羽  
曳野市、一九八八年）とする川岡氏の指摘  
との関連も窺え、近世中期から後期にかけ  
ての写本の軍記の享受を考える上で、興味  
深い指摘であると言えよう。

その他、〈薩琉軍記〉に対する認識の変  
化を確認し、対外情勢の変化や異国を意識  
した言説・琉球知識の取り込みなどにより、  
次第に架空の物語から歴史書として認識さ  
れるようになり、学問所や大名家・国学者  
による享受へとつながっていくことを明ら  
かにしている。物語の生長とともに物語自  
体に対する認識も変化し、さらにはそれが  
享受者の歴史認識にも影響を及ぼすさま  
は、この期の軍記にいくらか認められる。

だが、これほどまでに顕著であるのは、異  
国合戦という叙述対象や架空の合戦を描く  
という本書特有の叙述形態に由来するもの  
なのであろうか。

第四は、軍記と実録との関連である。義  
経伝承や変容する為朝渡琉譚を取り込んで  
いること、先のA4『琉球征伐記』とともに  
享受者層に特色のあることなど、多様な性  
格を有することが指摘されている増<sup>2</sup>『琉球  
属和録』は、実録作者堀麦水の手になるも  
のである。軍記と実録との関連については  
これまでさまざまに論じられてきたが、実  
録作者による本作は、麦水の著す実録作品  
との間にどのような相違や共通点を見いだ  
せるのか、両者の関係性を窺い知る上で、  
この検討は有益なものとなるであろう。

第五は、異国合戦記の中での位置づけと  
〈薩琉軍記〉の特異性である。〈薩琉軍記〉  
の成立は、他の異国合戦記に比して、出来  
事から大きく下っている。また、増<sup>1</sup>『絵本  
琉球軍記』以外の〈薩琉軍記〉はすべて写  
本の形で成立し、享受されてきた。先に第  
二において、成立当初から、琉球の日本へ  
の帰服と日本による征服・支配の正当性を  
述べることに主眼があったことを記した

が、このことと架空の侵略物語を創作する  
こと、写本で成立・伝来してきたこと、出  
来事から物語の成立までに隔たりがあるこ  
と、これらの意味はどこに求められるので  
あろうか。また、歴史書としての認識は成  
立の初期段階の作品から認められるもので  
あるのか。これらを他の異国合戦記との比  
較を通して検討し、異国合戦記群の中に位  
置づけていく必要があるだろう。

以上、まだ十分に紹介しきれないが、  
〈薩琉軍記〉は近世軍記として、軍記と実  
録との関連を探るものとして、近世期の対  
外情勢の変化や異国認識、歴史認識、人々  
の琉球への関心などを窺い知るものとし  
て、さまざまな点について考察していく上  
で重要な話題や論点を提供してくれる作品  
群である。目黒氏が「あとがき」において  
「私の仕事の一つの終着点は（終わりは始  
まりでもあるが）、〈薩琉軍記〉の問題点を  
明らかにするとともに、作品を世に広め、  
今後も研究が続いていく土台を築くことで  
あろう（p.769）」と述べるように、今後分  
野を超えたさまざまな者によって、大いに  
利用されていくべきである。本書はその際  
の基本文献となるものであろう。

(二〇一九年十二月 文学通信 A5版  
七八四ページ 一五、〇〇〇円＋税)

(せと ゆうき 関西大学非常勤講師)

新刊紹介

佐藤功著

『教科書御用達小説の主人公はクズで  
ヘタレばかり』

渡部裕太

本書は高等学校の国語教科書に頻繁に掲載される文学作品、いわゆる「定番教材」を取り上げ、その作品の「登場人物たちのダメな所」を指摘することで、教室での道徳的な読み方に一石を投じるものである。

著者の佐藤氏は高校教員であるが、本書は氏を取り組む一般向けの公開講座が基になっている。講義をそのまま書き起こしたような文体で統一されており、アイスブレイクに当たるちよっとした例え話や雑談も、広い世代に伝わるように工夫されたものが随所に散りばめられている。結果として、氏の語り口がそのまま聞こえてくるか

のような読みやすい良書となっている。

本書では、芥川龍之介「羅生門」、中島敦「山月記」、森鷗外「舞姫」、夏目漱石「こゝろ」、梶井基次郎「檸檬」、太宰治「富嶽百景」、横光利一「頭ならびに腹」、の計七作品がこの順序で取り上げられ、解説されている。「羅生門」から「檸檬」までは「高校教科書掲載数の順位(平成一五年～平成二七年)」通りの配置であり、「富嶽百景」は「平成二五(二〇一三)年から実施された戦後八度目の改訂によって、教科書掲載数五位となった作品」であるため、作品選定の基準は基本的には教科書掲載数の多い定番を、ということであろう。全体の構成として各作品の発表年代順ではなく教科書掲載数順に並べられており、冒頭から読み進めてゆくことで、多くの読者が、自身が高校で受けた授業の記憶と引き比べつつ理解できる工夫になっている。

これら定番教材の登場人物に対して、本書は一貫して、彼らが「クズでヘタレ」であることを指摘しつづける。それは高校の教室という道徳的・規範的空間のなかで読み解く際には言及しにくい要素に着目することで、読みを豊かにし、作品の面白さを

再発見するための試みなのである。

ここで、本書のタイトルになっている「クズでヘタレ」というキーワードにも言及しておきたい。本書に通底するのは、「近代」とはなにか、という問題意識である。各章で、近代的自我の懊悩、自由のなかの孤独、人間疎外、病と死、私小説と自然主義、といった文学史的な観点からの説明事項に触れつつ、それを通して、近代小説の苦悩する登場人物たちと現代の読者とのあいだに相同性や共感を見出させようとす。つまり、「クズでヘタレ」にみえる登場人物が示すのは「近代」のなかを生きる個人というものの弱さなのではないか、そしてその弱い姿は現代を生きる我々自身の写し絵になっているのではないか、と問いを突きつけるのである。

いずれの章でも、著者の確かな指導経験によって練り上げられた抜群の授業が息づかいもそのままに展開されている。取り上げられている各作品の具体的な指導例として学ぶのみならず、どのような授業が近代文学への興味関心呼び起こすのかを考える上で、優れた実践を間近にみられる貴重な機会になるだろう。(近代文学の教え方)

に悩んだ際には、是非目を通しておきたい一冊だと言える。

(二〇二一年二月、河出書房新社、四六版、二五四頁、本体一四〇〇円)

(わたなべゆうた 本学兼任講師)

山田夏樹著

『ブックレット 近代文化研究叢書 14  
「ドヤ街」から読む「あしたのジョー」』

泉 溪 春

本書は、連載終了後五〇年近くを経てなおマンガの〈古典〉として愛され、読み継がれている「あしたのジョー」(高森朝雄(梶原一騎)原作、ちばてつや作画『週刊少年マガジン』一九六八・一・一〜七三・五・一三)を対象とし、特に「ドヤ街」に注目することを通して、従来主流となっていた反体制という枠組みでは捉え切れない要素を分析し、その〈今日的魅力〉を探るものである。以下に目次を記したのち、各章の内容を大まかに見ていく。

はじめに(4)／序章 同時代評の限界―反体制の枠組みを越えて(7)／1 山谷の暴動とジョー―力石登場以前(10)／2 左右のせめぎあい―〈実行〉の場としての「ドヤ街」(14)／3 ジョーの「あした」とは―「ドヤ街」と可能性(16)／第1章 比喩としての肥大化した身体―「壁」解体の試み(24)／1 ボクサーとしてのジョー―手段と目標(25)／2 ボクシングとは―戦後とス

ポーツ(30)／3 戦後日本への批判意識―梶原一騎の「個人主義」(35)／4 金は「力石におとる」のか―「立ちあがり」続けること(40)／5 「過去」と

「あした」―力石の再浮上(46)／第2章 変化する「ドヤ街」―「過去」との対峙(49)／1 金の「過去」と現在―「地獄」をめぐる(50)／2 「引き揚げ」と現在―ちばてつやの「非定住者感覚」(52)／3 描きかえられる「ドヤ街」―ちばてつやとジョー(57)／4 「焼跡のイエス」の後継者たち―「少年」とジョー(60)／5 「なみだ橋」と懸け橋―「チビ連」との関わり(62)／第3章 〈人間〉化するジョー―戦後を問う姿勢

(67)／1 「あした」の力石―マンモス西との差異(70)／2 ボクシングによる描きかえ―「あした」と現実(74)／3 「クロスカウンター」とは―先行者との交わり(77)／4 力石の死―「ことん打ち合うこと」の両義性(81)／5 グローブのゆくえ―ジョーと葉子(85)／おわりに(95)

序章では、同時代評を丹念に拾い、「あしたのジョー」が反体制の象徴として読まれていたことに触れながら、そうした枠組みでは捉え切れない側面があることを示していく。これまで「あしたのジョー」は〈力石生前／力石死後〉として区分され、寺山修司やよど号事件のリーダーによる声明文などが代表するように反体制の象徴とされてきた。「あしたのジョー」の「ドヤ街」を、山谷(東京都台東区)を重ねたものとする筆者は、同時代における山谷との共振を認めつつも、ジョーが権力への抵抗を示すのは力石に出会うまでであり、力石と出会ってからの「ドヤ街」からは反体制の要素は消えるという。また、三島由紀夫「音楽」と石川淳「焼跡のイエス」と

いった戦後近代文学における「ドヤ街」表象を通して、「力石登場以後の本作では、権高な語り手「わたし」を変えた「焼跡のイエス」の「少年」と同様、ジョーが持つ、人を変える可能性が描かれる」と述べる。

一章では、戦後日本社会を「肥大化した身体」とする認識を示し、それが壮絶な「過去」をもつ金に対するジョーの劣等感とも関わっていることを論じながら、金戦におけるジョーの勝利に「過去」を特権化する金との相違を見出す。

戦後においてボクシングは、科学的なスポーツとして市民権を得ていく。石原慎太郎「大陽の季節」、三島由紀夫『鏡子の家』を週上に載せ、ボクシングが暴力性を帯びつつも、体制との関わりにおいて描かれることを示す。朝鮮戦争で壮絶な体験を経た金は、ボクシングを「ままと」と、体重制限に苦しむジョーを「満腹ボクサー」と揶揄するが、そうした比喻は梶原一騎の他作品で見られるような、戦後日本を肥大化した身体として捉えるものと一致する。ジョーは金によって、朝鮮戦争などで経済復興し、肥大化していく戦後日本になぞらえて捉えられてしまうのであり、ジョーもまた、

そうした金に圧倒されてしまう。

金はまた、試合においてもジョーを圧倒するが、ジョーは何度でも立ち上がり、「おまえは力石に おとる」という認識を揚力に勝利する。ジョーが金と力石を対比し、勝利を収めていくことについて、これまで疑問が挙げられてきたが、対金戦で書かれるのは「おまえは力石に おとる」ではなく、〈金はジョーにおとる〉という構図である。「どちらも決定的な「過去」を体験しながら、時を止め「子ども」の段階に留まり続ける金と、「成長」し「あした」を志向するジョーとの、差異」が勝敗を分けたのである。金が代表するような、戦後を一面的に捉える見方の乗り越えが描かれるのであると述べる。

二章では、金の朝鮮戦争の「過去」、「ドヤ街」の閉鎖性を検討したのち、自身だけでなく周囲をも巻き込んで変化するジョーの造形に「焼跡のイエス」の「少年」を重ね、そうしたありように「世界を一面的な〈壁〉」とみなす認識への批評性を示す。

引き揚げの体験が「国民の物語を再強化」する可能性を戦後文学研究の蓄積から

援用しつつ、金の「過去」語りに同様の物語化を指摘する筆者は、にもかかわらず朝鮮戦争をめぐる金の「過去」が「異様な迫真性」を有しているのは、ちばの引き揚げ体験が映し出されているからであるとす。思わぬ形で「迫真性」を有することとなった金の「過去」は、戦後日本を肥大化した身体とみなす原作の枠組みにひずみを生じさせるのであり、ジョーもまた、引き揚げの物語を解体する存在なのである。

つぎに、満州で「中国人」に襲撃されたちばの体験が、「ドヤ街」の排他的・暴力的な表象に繋がっていることを述べつつも、ジョーとの関わりのおかげで「ドヤ街」は閉鎖空間としては描かれなくなっていく。そして引き揚げ、戦争孤児、反体制といったイメージを引き受けつつ「成長」するジョーは「焼跡のイエス」の「少年」に重なるのであり、プロボクサーとして世界へ進出するありようは、「ドヤ街」が象徴する「歴史的負の堆積」を、引き受けつつ「あした」を志向する姿なのである。

ジョーのこうしたありようは、戦後から現代にかけて続いている「世界を一面的な〈壁〉」のように捉える認識への批評性を

もつ。「時代を画的に捉えるあり方を越え、「過去」と対峙し「あした」を目指すジョー」にこそ、「本作の現在性」があるのであり、「時代を超越した間」が投げかけられていると述べる。

三章では、「あしたのジョー」における登場人物の身体性を検討し、ジョーの（人間）化について考察したのち、「クロスカウンター」の分析を通して（生身の身体）による「あした」の目指し方を論じる。

身体性の検討としてまず対象となるのは減量する力石である。力石が大男であることが梶原とちばの認識の相違により生じたことを踏まえたうえで、それでもなお、力石の身体を修正せずに減量に苦しむストーリーが選ばれていることに注目し、それは力石がジョーと同等の比重をもつ（人間）として扱われているからだとする。「あしたのジョー」には（記号の身体）ではなく（生身の身体）が描かれるのであり、ジョーが最後に「まっ白な灰」に「燃えつき」る場面は、まさにダメージを蓄積する身体として表象されている。

また「クロスカウンター」について「世の中」と相対し他者と交わりながら

「あした」を目指すジョーの行為のアクセントあるいは物語の流れの転換点を示す指標と見なすことができる」としつつ、一方で力石が少年院の試合以降ジョーと「クロスカウンター」で相交えることがないことに注目する。ジョーとの再戦において、力石の強さがアッパーカットに象徴されるのは、「歴然とした力の差」を見せるものであると同時に、「とことん打ち合うこと」が勝負の全てではないということである。

力石の死以後、ジョーは「クロスカウンター」を切り札のように出さなくなるが、それは「あした」を目指すことが命を削ることではないという力石の姿勢に学んだものである。こうした「成長」にジョーの（人間）化をみることができるのである。最後に、ジョーが葉子にグローブを渡し「まっ白な灰」に「燃えつき」る姿の分析を通して、「あしたのジョー」とは「歴史の揺曳や堆積物を背負いつつ、「過去」と対峙し「あした」を目指す主人公の成長を描いた物語」なのであると結論する。

以上みたように、本書はマンガの表象分析はもちろん、梶原一騎、ちばてつやなどの言説や他作品の比較対象のみならず、「下

ヤ街」「ボクシング」などの同時代表象や、引き揚げの語りについての分析を戦後近代文学（研究）の蓄積から援用していく。今回は言及できなかったが、TVアニメとの差異にも目配せをする本書は、多様な領域を横断しながら、「あしたのジョー」の細部に踏み入り、その魅力を明らかにしているものである。また、本書の表紙は「まっ白な灰」に「燃えつきた」ジョーのフィギュア写真となっており、格好良い。ぜひ多くの方に手を取っていただきたい。

（二〇二〇年一〇月 昭和女子大学 近代文化研究所 B5判 九六頁 一〇〇〇円＋税）

（いずみけいしゅん 本学大学院博士後期課程）

石崎等著

「有る程の菊  
夏目漱石と大塚楠緒子」

住友直子

本書は著者の最終講義を端緒とし、広範な資料を精密に解説・検討・推論すること



により結実した浩瀚な書物である。具体的には、漱石と大塚保治・楠緒子の〈三角関係的〉欲望関係を文化史的な問題として捉え、それが漱石の中期から後期かけての文学活動を積極的なものとしたことを確認し、また大塚楠緒子の文学的業績の再評価を期するものである。

楠緒子は竹柏園に入門し、佐々木弘綱・信綱に短歌を学び『心の花』系の歌人・新体詩人として出発し、〈われ〉と〈汝〉の弁証法的なダイアログを突き破り、より一層内面化された（＝他者との関係性を表現しようとする）弁証法的モノローグの歌の可能性を求めようとした。

才色兼備の大塚楠緒子は帝国大学生の間で評判の女性であった。大塚家の婿養子選びの話は帝国大学の舎監にもたらされ、経済的に優位であった小屋保治に見合いの白羽の矢が立った。保治、漱石ともに大学生のときから楠緒子と多少の面識があったと推測され、楠緒子が文学の分かる漱石にも関心を抱き選択の迷いが生じた時期があったと考えられる。保治は静岡県興津における見合いに成功するが、それは漱石にとって痛恨の「失恋」体験であった。漱石に

とっては、楠緒子が運命の鍵を握った不可解な女性としてあり続け、保治・楠緒子夫婦にとっては、漱石の存在は心の棘としてあり続けた。楠緒子との出会いなくして、漱石の〈狂〉や〈疾〉の発現はなかった。

そのような病理のきっかけは、楠緒子と結婚した保治の存在を抜きにしては考えられない。そういう意味で、楠緒子の存在は特権的な対象＝母胎たりえた。

ただ、漱石の英文学者としての成功と〈狂〉を担保とした小説家としての社会的名声は一〇数年後の一九一〇年あたりを境にしてその立場を逆転させ、小説家として生きようとしていた楠緒子は漱石に師事し、保治の夫婦関係に亀裂をもたらすことになる。このとき楠緒子にとって保治は自分〈文学〉に生きるための切り札ではなくなっていた。また保治は夫として楠緒子の〈書く〉という文学的現実を容認しなから、そのことを認めたくないという願望ゆえにダブル・バインドに置かれていたといえる。保治にとって、その後に浮上した愛人問題は、そうした夫婦関係の軋轢に対する反逆だったと推測される。

楠緒子は一九一〇年、三十六歳の若さで

死を迎える。晩年の歌群には、保治との〈対幻想〉の崩壊と断念、漱石への敬慕の高まり、作家としての自立的な生き方がある。

漱石は心の恋人として存在感を増していた。楠緒子の場合、異性や家族を支える共同の原理である〈対幻想〉は決壊し、文学という個的幻想世界が凌駕し始める。それは成長を願っていた小説よりも短歌という表現領域において発揮されていった。

本書の裏表紙には楠緒子の晩年の絶唱と漱石の楠緒子追悼の句が並列して印字され、幽明界を異にした二者それぞれの存在感を現在に慥かに放っている。

かくてわが恋は生きたりなか／＼に契らざりしを今は悔まぬ（大塚楠緒子）  
有る程の菊抛げ入れよ棺の中（夏目漱石）

（二〇二〇年一〇月 未知谷 四六判 四二九頁 本体六、〇〇〇円）

（すみとも なおこ 本学日本学研究所研究員）

佐藤秀明著

## 『三島由紀夫 悲劇への欲動』

本橋 龍 晃

本書は、三島由紀夫の没後五十年となる節目の年に刊行された。新書というコンパクトな形式ながらも、三島研究をリードしてきた佐藤秀明氏が、作者の作家活動全体を意味づけた野心的な著作である。

著者は、『仮面の告白』から「太陽と鉄」にまで通底する「悲劇的なもの」と「身を挺してゐる」という感覚を捉えるために、「前意味論的欲動」（言語以前の原初体験として現れる、何かへの執着）という概念を導入する。これは、ラカンの「享楽」、バタイユの「エロチシズム」といった概念と接点があり、三島が五歳の時に見たとされる汚穢屋の印象に始まって、「身を挺する」対象として天皇を据えたことよって完結するとされる。

では、三島の前意味論的欲動はどのように現出してきたのか。この問いに応えるために、本書ではまず資料的な困難のあった三島の生家が調査され、生育環境と軍国主

義的な身体の訓育を施していた学習院の校風の中で、三島が肉体的なコンプレックスを抱えつつ創作へと向かっていく様子が描き出される。こうした心理状況が後年のボディビルや自衛隊入隊へと続くだけでなく、「花ざかりの森」を『文藝文化』から発表してロマン派の心情を無批判に受け入れていく土壌を作ったのだと論じられている。

戦時下に勤労働員から帰宅してすぐに入営通知を受け取った三島は、発熱していたために「即日帰郷」を命じられる。著者は、田舎での徴兵検査を進めた人物として、平岡家の勤めによって農林省に入省していた好田光伊の名を挙げており、精緻な実証的分析に興味を惹かれる。こうして、K子嬢との失恋、鎌倉文庫の雑誌「人間」や婦人雑誌からの作品発表などを経ながら、前意味論的欲動を男性同性愛によって満たしていた三島が、『仮面の告白』や『禁色』を発表していく過程について丹念に跡づけられていく。

三島にとって一つの転換点となったのは、本書でも紙幅を割いて取り上げられている海外旅行であろう。ギリシャへの渡航

は『潮騒』へと結実し、本格的な取材による作品執筆の契機となったと著者は述べる。このころ、三島は豊田貞子との交際をスタートし、飛躍の時期を迎える。精神的に安定した三島がボディビル、神輿担ぎへと向かっていったことが、本書では「前意味論的欲動の芽生え」とされている。こうした見取り図によって示される、『金閣寺』の溝口が物語の終盤に突然死を決意することへの解釈は、まさに本書なりの慧眼であろう。

以上のような過程を経て、三島の前意味論的欲動は、「憂国」や「愛の処刑」における切腹のモチーフ、「弱法師」、「薔薇と海賊」、「美しい星」、「午後の曳航」など固有の「理念」を生きた主人公の形をとって現出する。とりわけ、映画版「憂国」では三島自身が主人公の武山信二役を務めながらも、三島でも武山信二でもなく人間一般としての苦痛を表現しているように見えると著者は述べている。まさに「前意味論的欲動の全的な解放」に他ならない。このことと、「英霊の声」や「文化防衛論」で登場する天皇の問題は地続きである。著者によれば、三島は疎外を感じてきた自らの前

意味論的欲動を、国民国家的な普遍性に位置付けようとしたのだという。

だからこそ、認識ではなく行動に傾斜した三島は楯の会を組織し、「斬死に」を計画しながら『豊饒の海』を執筆する。最終的に「斬死に」は頓挫していわゆる「三島事件」を引き起こすこととなるが、「死後に成長する作家」としての三島の作品は、なおも多くの読者を呼び込んでいると結論づけられる。

代表作の丁寧な内容紹介に留まらず、三島の文学と生涯を貫く根幹を浮かび上がらせている本書は、初学者から研究者に至るまで必携の書といえる。今後、本書の成果を引き継いださらなる三島論の登場が俟たれる。

(二〇二〇年一月二〇日 岩波書店 新書版 二七〇頁 本体八六〇円)

(もととはし たつあき 立教新座中高教諭)

染谷智幸編

東アジア文化講座1  
『はじめに交流ありき 東アジアの文学と異文化交流』

齊藤 探花

今、世界は、「実学偏重の時代」に突入した。役に立つかどうかという基準が、学問にも当てはめられるようになりつつある。この変動に伴って、日本文学、そしてその研究のありかたが問われている(本書「総序」)。本シリーズは、こうした背景のもと、日本国内のみで完結する傾向があった閉鎖的な日本文学研究から脱し、世界に向けた研究を目指して編まれたものである。本シリーズのまなざしは、今日主流となりつつある英語圏ではなく、「漢字漢文」を通して繋がっている中国・朝鮮半島・日本・琉球・ベトナムといった「東アジア」に向けられている。東アジアの文学・文化を、諸国間で「共有」されるものとして見つめなおし、多角的なアプローチを試みている。

このうち、本書は、第一巻に位置し、「交流」をテーマとする。構成は以下の通りで

ある。

総序 東アジアの文化と文学 小峯和明  
序 はじめに交流ありき——東アジアの文学と異文化交流 染谷智幸

第1部 東アジアの往還

01 渡海記と漂流記——十六世紀以前を

中心に 鈴木彰

02 漂流と漂着——『韃靼漂流記』を中

心に 水谷隆之

03 遣唐使の文学——往来する人々 水

口幹記

04 遣明船と策彦周良——黒衣の交渉人

空井伸一

05 大航海時代のキリスト教とアジア—

—ザビエルの鹿兒島伝道 岡美穂子

06 朝鮮通信使と燕行使の文学 高橋博

己

07 琉球と唐・ヤマトの交際・交叉——

一七—一四年の江戸立を中心に 島村

幸一

08 崔致遠と東アジア——『補安南録異

図記』を中心に 金英順「コラム」

09 日朝文人の交流——『兼葭雅集図』

の例から 鄭敬珍「コラム」

第2部 海域と伝承

01 黒潮文化圏と新「海上の道」——柳田国男の想像力 角南聡一郎

02 農業国家アンコールの「航海神」観音 宮崎晶子

03 媽祖と海域の文化 菊池章太

04 日本海海域の文芸——幸若舞曲『笈搜』小考 宮腰直人

05 海域生物をめぐる言説——シヤチ・クジラを事例として 杉山和也

06 朝鮮の海域伝承——玉英、東アジアを放浪する 朴知恵「コラム」

第3部 島嶼の文化

01 港市と島嶼の文学——北九州海辺の伝承世界から 菊池仁

02 中台交流史からみる台湾の宗教文化——三山国王信仰を事例として 志賀市子

03 台湾の鄭成功伝承 小保喜久雄

04 奄美のユタ伝承と東アジア 福寛美

05 八重山の文化 澤井貞代

06 古代中国と濟州島の交流 黄暁星

「コラム」

07 八重山・小浜島の念仏歌 酒井正子「コラム」

第4部 交易と文化

01 海賊と海商 森田雅也

02 東南アジア交易と中国人町・日本人町 松浦史明

03 明末白話小説と海外貿易 中島楽章

04 長崎民衆の異国認識 位田絵美

05 経済小説の胎動と東アジアの交易——経済以前と貨幣の歴史 染谷智幸

06 文化力と政治・経済——朝鮮半島のルネサンスと南北対話 Emanuel Pastreich

07 仏教経典と長者伝承 堀部正円「コラム」

08 東アジアの紙銭 森田憲司「コラム」

09 南シナ海の高盗——張保仔と女海賊 鄭一嫂 松尾恒一「コラム」

第5部 東アジアの聖地

01 五台山の仏教文化——東アジアが育んだ歴史 小島裕子

02 普陀山と観音信仰 張龍妹

03 泰山と日本の古典文芸——泰山名句と封禪説話を中心に 李銘敬

04 金剛山像——金同伝説とその変遷 龍野沙代

05 〈聖地〉の近代化と東アジア 染谷智幸

06 反逆者たちの聖地 丸井貴史「コラム」

執筆者一覧  
索引(人名・書名・地名)

このように、本書は大きく「東アジアの往還」「海域と伝承」「島嶼の文化」「交易と文化」「東アジアの聖地」の五部で構成されている。一般的に、「交流」は、「文化」があつてはじめておこるものとして捉えられがちである。「序」では、むしろ「交流」こそ、今日までの東アジアの「文化」の形成に大きな影響を与えてきたことが述べられている。こうした、まさに「はじめに交流ありき」という視座は、本書に通底するものである。

以下、各章の内容を大まかに見ていきた

い。

第一章は、交流のなかでも、東アジア諸国間の「往還」をテーマとする。よく知られている朝鮮通信使・遣唐使などの公的な交流はもちろんのこと、渡海・漂流という私的な交流にも焦点が当てられる。本章は、前半に、渡海記・漂流記の資料群、近世文学（『韃靼漂流記』など）にみえる私的な「往還」をとりあげる。後半には、朝鮮通信使・遣唐使のほかにも、遣明使・禅僧やフランシスコ・ザビエルの通訳案内人の公的な「往還」をとりあげる。東アジア諸国のさまざまな形の交流の実態が論じられていると共に、こうした「往還」を受け止めた人々の、また見ぬ世界への想像力によって、文芸作品が再生・創造されていく様相が解き明かされている。

第二章は、前章を受け、人々やモノが交わる共有圏として「海域」を取りあげる。柳田国男による「海上の道」、すなわち黒潮の言説から書き起こされ、海をめぐる観音信仰や伝承の伝播と再生の様相が論じられる。幸若舞や、シヤチ・クジラなど海域生物に関する資料を通して、中世日本の海域をめぐる想像力の展望が示されている。

第三章は、「島嶼」に注目し、その「文化」交流をとりあげる。隣接していても異なる文化をもつ島々は、諸文学にあらわれる伝説や伝承の受け止めかたも異なっている。北九州の沈鐘伝説、台湾における三山国王信仰（中国広東省の地方信仰）や鄭成功伝承の伝播と土着化、奄美のユタ伝承と朝鮮半島とのかかわり、八重山（琉球諸島の南西端）の信仰・祭祀・芸能など、伝説・伝承のもつバリエーションと、その背後にある豊かな文化交流を論じる。

第四章は、交流のなかでも、商業的な「交易」をとりあげる。海賊を中心とした海商についての論からはじまり、交易によって形成されていった日本人町・中国人町、長崎にみる異国と来訪者に対する認識、井原西鶴から現代の池井戸潤までつづく経済小説など、多角的に文化をみつめた論考がある。

第五章は、「東アジアの聖地」をとりあげる。「聖地」そのものというよりも、聖地巡礼のような「聖地」をめぐる人々やモノの交流を見渡している。五台山（中国）、普陀山（中国）、泰山（中国）、金剛山（朝鮮半島）といった「聖地」の伝承・信仰が

変容する様相が、文芸作品や資料から読み解かれる。

以上の第一巻につづく第二巻は、金文京編『漢字を使った文化はどう広がっていたのか 東アジアの漢字漢文文化圏』である。ここでは、「漢文の多様性」をテーマに、総勢四三名の研究者による論考がおさめられている。

どちらの巻にも、論文のほか、各章末に、コラムが設けられている。各章のテーマに対し、「仏教経典と長者伝承」や「反逆者たちの聖地」など、興味をかきたてる切り口で迫っている。本編のおおきな窓から入るもよし、コラムのちいさな窓から入るもよし。どちらの窓からでも、見える景色は、はるかに広がっている。本書には、立教大学に関わる多くの研究者も参加している。あらゆる人々にひらかれた本書をぜひ手にとってみてほしい。

（二〇二二年三月 文学通信 A5版 四四七頁 本体二八〇〇円）

（さいとうたか 大学院博士後期課程在学学生）

小峯和明編

東アジア文化講座3

『東アジアに共有される文学世界—東アジアの文学圏—』

大竹明香

「東アジア文学講座」の第三巻である本書は、これまでの文学に関する問題意識をひとつの国・ひとつの地域にとどめるのではなく、〈漢字漢文文化圏〉の視点からさらに視野を拡げ、「東アジアの文化圏」において共有される課題を、いくつもの視点から捉えることを目的とするものである。

まずは、本書の構成をあげる。

序 東アジアの文学圏 小峯和明

第1部 東アジアの学芸

儒教の世界—近世日本の場面から 中村

春作

東アジアの注釈学—宗・遼・高麗・日本をつなぐ〈注釈の知〉 小川豊生

医学と本草学—十六世紀以前の中国と日本を中心に 岩本篤志

類書の「世界」 井上 亘

絵と絵師にみる日本と中国 楊 曉捷

軍書・軍学・兵法 井上泰至

中国古代兵学—漢文圏の兵学研究 司

志武

占術書—文芸交流の事例として「コラ

ム」 Mathias Hayek

盤上遊戯「コラム」 原 克昭

第2部 東アジアの宗教と文学

仏伝の変成—浄飯王の物語 趙 恩鶴

法華経の文学的な営み—『本朝法華験

記』を事例として 馬 駿

道教と神仙—『列仙伝』から『列仙全

伝』へ 千本英史

東アジアと陰陽道 山下克明

キリシタン文学と東アジア—キリシタン

版の側面 神田千里

韓国の檀君神話と檀君神話 張 哲俊

北部ベトナムの宗教文化—九天玄女信仰

の発展 大西和彦

須弥山と芥子—極大と微小の反転「コラ

ム」 高 陽

仏陀の夢と非夢—西行伝への示唆をもと

めて「コラム」 荒木 浩

神道と東アジア「コラム」 伊藤 聡

第3部 東アジアの侵略と文学

モンゴルの侵略とその言説—『越旬幽霊

集録』を読む 佐野愛子

倭寇と文学—中国明清文献にみる秀吉像

を中心に 陳 小法

千辰倭乱とその文学 松本真輔

琉球侵略と文学—〈薩琉軍記〉の世界

目黒将史

蝦夷と北方の言説 徳竹由明

亡命・拉致の文学 樋口大祐

東アジアの鄭成功「コラム」 韓 京子

ベトナムの英雄像「コラム」 高津 茂

韓国から見た日本の耳塚「コラム」魯

成煥

第4部 東アジアの歴史と文学

琉球の歴史叙述と説話 木村淳也

朝鮮の野談と歴史書—戦乱ものを中心に

野崎充彦

歴史と説話との交差—ベトナムの「剣湖

伝説」を事例にして Pham Le Huy

正史と稗史の間隙「コラム」 洪 晟準

『三国史記』と『三国遺事』 袴田光康

東アジアの地図を読む—十九世紀大坂商

人の東アジア「コラム」 小林ふみ子

第5部 東アジアの文芸世界

才子佳人の世界 鄭 炳説(金 英順 訳)

かなとハンゲル、王朝と女性文学 金 鍾徳

東アジアの笑話―滑稽の類似と相違 琴 榮辰

『剪燈新話』と日本文学―『錢湯新話』から『浮世風呂』まで 近衛典子

『剪燈新話』の東アジアへの展開と『金鰲新話』[コラム] 染谷智幸

「伝」の世界―『孝子伝』から『阿Q正伝』まで [コラム] 宇野瑞木

執筆者一覧  
索引(人名・書名・地名)

このように、五つの大きな課題を設定している。以下、大まかに本書の内容を紹介したい。

文学における東アジア文化研究については、小峯和明氏が序章において述べているとおりである。近年、東アジア文化研究は歴史学が牽引してきた。しかし、東アジア文化研究は形あるものだけでない。その対象については、言語表現、テキストの中か

ら考えることなど、未開拓であるものも多い。すなわち、実証史学の分野だけではなく、対象化することが、本書の立場である。また、小峯氏は日本における「東アジア文学史」の課題と可能性についても言及している。

第1部は、「東アジア文学圏」で共有される学芸に焦点を当てて。儒学や本草学、類書、絵巻、兵法等が、その時代、その地域でどのように享受されていたのか、それぞれの特徴などに言及する。

第2部では、東アジア文化圏に共有される宗教と文学のかかわりをとりあげる。宗教と文芸は密接な関わりがあり、仏教や道教、儒教、陰陽道、キリシタンなどの宗教は、その地域の文学にどのように受け入れられ、浸透していったのか。また、どのように文学に影響し、どのような拡がりを見せるようになるのか、その様相を捉える。

第3部は、戦争と文学に焦点を当てて、たんに、「戦争」、「いくさ」ではなく、「侵略」という立場、まなざしから、テキストをとらえなおす試みがなされている。侵略する／されるという捉え方をとおすことに

より、テキストとどのように向き合うことが可能となるのかなど、今一度、読みの課題を問い直すものである。

第4部では、歴史叙述を取りあげる。ここでは正史だけを対象とするのではなく、稗史や野史など、様々な歴史叙述の様相をとらえる。正史から零れ落ちた、あるいは排除された側面にも焦点を当て、正史と比較することにより、歴史を読むことの新たな可能性を指向する。

第5部は、東アジア文化圏における物語や説話、小説などに焦点を当てて。ここでは、中国、日本、朝鮮半島の文芸作品を比較することにより、文字やモチーフ、文芸の享受などの、それぞれの地域における共通、類似点と、その差異を明らかにする。

以上、大まかに本書の要旨を述べてきた。「東アジア文化圏」という視座から、新たな文学世界の拡がりに触れることができる。

また、本書に続く第4巻、東アジア文化講座4・ハルオ・シラネ編『東アジアの自然観―東アジアの環境と風俗』は、「東アジア文化圏」における環境文学を主題とするものである。環境文学は、今日の環境問

題への意識からも注目されるテーマである。構成は、

第1部 地理、気候、文化

第2部 四季の文化と詩歌―二次的自然の世界

第3部 風俗と文化

第4部 食文化と文芸

第5部 年中行事と芸能

以上の全5部から成る。東アジアにおける自然観について、総勢三十九名の研究者が論じる。

古来より人やモノなどの交流が盛んであった「東アジア文化圏」をひとつの文化圏として捉える視座は、今後の文学研究を切り拓くものとして注目される。ぜひ本書を繙かれない。

(二〇二一年三月 文学通信 A5判 四六〇頁 本体二八〇〇円)

(おおたけあかり 大学院後期課程在学)